生活科・総合的な学習を核とした教育活動の取組

淡路市立志筑小学校
主幹教諭　南　志乃婦

１　取り組みの内容・方法

平成２９年３月末に、平成３１年度生活科・総合的な学習研究協議会全国大会兵庫大会の会場校の一つが志筑小学校に決まった。そもそも、生活科・総合的な学習の時間を充実させるためにどこから始めたらいいのかわからない。全く手探りの状態から研究が始まった。その時の研修担当者として、研究推進委員の先生方と協力したり、他の２校の会場校の先生方と協議を重ねたりしながら、研究を進めていった。また、大学の先生にご指導を仰いだり、全国小学校生活科・総合的な学習研究協議会兵庫大会研究部長の先生にアドバイスをいただいたりして、研究を深める努力を続けた。

研究の足跡は、次の通りである。

＜平成２９年度＞

生活科・総合的な学習研究協議会全国大会の過去の取組がどのようなものであったかを、資料から探っていった。夏休みには、先進的な取組を進めている奈良女子大学附属小学校を訪れ、生活科・総合的な学習の授業を参観した。授業参観後、参加した先生方と何から始めたらいいのか等、本校に必要な内容について話し合った。また、加古川で行われた兵庫県小学校教育研究会生活科・総合な学習部会夏季研修会に参加し、文部科学省視学官の渋谷先生、國學院大學の田村先生から新学習指導要領について教えていただいた。

秋に、全国大会（横浜大会）に参加し、授業や大会運営の様子をビデオや写真に記録し、持ち帰って全職員で共有した。自分たちが思う以上に全国大会のレベルが高いことに衝撃を受けた。年度末には、これから志筑小学校に必要と思われる「発言力」「見通しを持った学習の進め方」「探究的な学習」などの力をどのように捉え、どのようにそれらの力を付けていくかを話し合い、全職員で共通理解した。

＜平成３０年度＞

前年度末に確認したことを、年度当初に異動してきた先生にも伝え、年度のカリキュラムを作成した。夏休みには、前年度と同様、奈良女子大学や兵庫県小学校教育研究会の部会に参加し、生活科・総合的な学習についての研修を進めた。また、甲南女子大学の村川先生にご指導いただき、全国大会の授業構想について全職員で話し合いを進めた。秋には、全国大会（石川大会）に参加し、授業や大会運営についてのノウハウなどを学んだ。また、全国大会のプレ大会を開催し、淡路地区の先生方に授業を公開した。まだまだ足りないところが確認できるなど、有意義なプレ大会となった。

＜平成３１年度＞

いよいよ１１月１４日、１５日に全国大会本番を迎えるということで、４月から村川先生をはじめ、関西福祉科学大学の馬野先生、武庫川女子大学の酒井先生にお越しいただいて、本校がめざす生活科・総合的な学習について、異動してきた先生方も交えて方向性を確認するなどの研修を行った。３年間の研究は「研究の概要」としてまとめ、大会冊子に掲載していただいた。次のページに、その一部を紹介したい。

◇　研究主題

一人一人が主体的に探究する授業の創造

～地域から学び、ふるさとに心を寄せ続ける子どもたちを目指して～

◇　主題設定の理由

＜主題を設定するまでの経緯＞

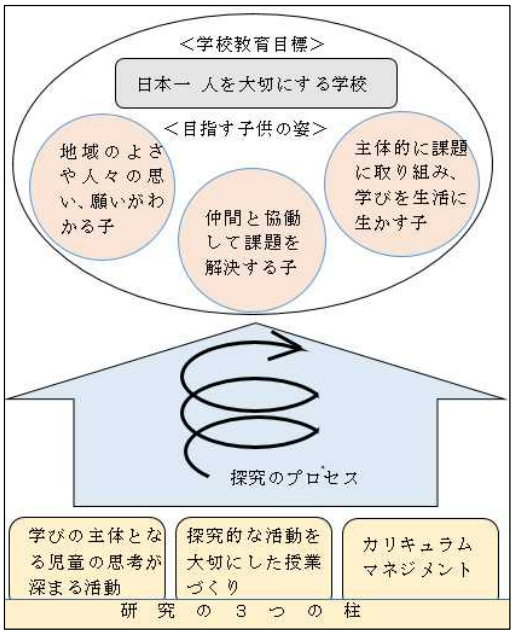
本校の教育目標は「日本一 人を大切にする学校」である。数年前まで子どもたちが落ち着かず授業に集中できない子、教室に居場所がなく外に出ていく子、自分に自信がなくて上手にコミュニケーションがとれずに困ってしまう子など様々な課題を抱えている子がたくさんいたことから、一人一人を大切にし、個の育ち、集団の成長を認めほめていこうという思いを込めて定められたものである。

＜主題設定にあたって＞

本校では、一人一人を大切にし、なかなかやる気の出なかった子どもたちが学習課題を自分ごととしてとらえ、やる気や意欲をもって粘り強く課題に取り組むようになること、探究的なプロセスに基づいて身近な生活や地域から課題を見つけ、仲間とともに主体的・協働的に解決することを目指して研究主題を設定した。そして、この学びの過程や充実した学びの体験、地域とのかかわりがふるさとに心を寄せ続け、誇りをもてる子どもたちへとさらに成長させていくと考え、副題を「～地域から学び、ふるさとに心を寄せ続ける子どもたちを目指して～」とした。そこには、小学校の系統立てたカリキュラム・マネジメントによりたっぷりと地域とかかわった子どもたちが、中学校、高校での学びや社会に出てからの生活の中で、地域に誇りをもち続けてほしいという願いが込められている。

＜研究にあたって＞

兵庫大会のテーマである「子どもが変わる」「教師が変わる」「学校・地域が変わる」の３つの視点を意識して３つの柱（内容については「Ⅱ 研究内容」で詳しく述べる）を設定した。その上で、本校が目指す子どもの姿を３つの資質・能力の観点に沿って整理し、「地域のよさや人々の思い、願いがわかる子」「仲間と協働して課題を解決する子」「主体的に課題に取り組み、学びを生活に生かす子」とした。どの学年も地域に材を得て活動する中で地域のよさや人々の思いに気付く子になることを期待している。そして、探究のプロセスにおいて仲間と協働することに喜びを見いだし、主体的な学習から学んだことを学校生活や地域の中で生かしたり、活用したりできるようになることを願っている。



（１）学びの主体となる児童の思考が深まる活動

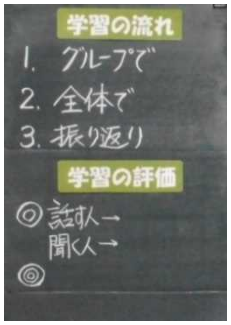
①学び合い

本校では、自分と「ひと・もの・こと」とを体験や経験、知識のやりとりで結ぶときに生まれる次のような場を学び合いと定め、このような場のくり返しにより、思考が深まると考えている。

〇友達、先生、家族、地域の人やその他のさまざまな「人」及び「もの、こと」との対話を通して、既存の知識と新しい知識が結びつき、新たな考えが生まれる場。

〇各教科で得た知識や地域にある社会的概念、事実的知識などの定着を図る場。（知識の定着）

〇得た知識をさまざまな場面で使おうとする場。



②見通しとふり返り

本校では、すべての授業において、右のように小黒板に「学習の流れ」と「学習の評価」を書くようにしている。授業の最初に見通しをもって取り組めるように学習の流れを示す。次に、子どもたちは自分たちで学習の評価を考える。それをもとに、授業の最後にふり返りをすることで、自分たちで新たな課題を見つけることができる。

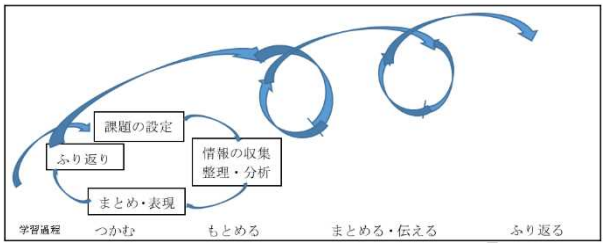
③スピーチタイム

本校では、全ての学級において朝の活動の時間にスピーチタイムを導入している。「３文スピーチ」といい、自分で見つけた題材について３つの文でみんなに伝える。

（２）探究的な活動を大切にした授業づくり

①探究的なプロセスを大切にした単元デザイン

本校では、総合的な学習の時間における探究的な学習の過程に「ふり返る」を加えた探究のプロセスを、生活科では子どもの思いや願いを実現するプロセスを大切して単元をデザインする。単元計画のどの学習過程でも探究的なプロセスを取り入れることで、探究的な活動の流れがわかり、見通しをもって主体的に取り組めるようになる（図）。



「学習指導要領に示される探究的な学習の過程」をもとにした本校の「単元における探究的な学習のイメージ」

②見取りと評価（授業リフレクション）

子どもたちの行動や発言、ノートやワークシート、その他の成果物からしっかりと個々の育ちを見取り、どのように評価するのかを全職員が共有している。また、公開授業の後の授業リフレクションについて研修を行い、付箋を使って個の育ちを見ていくことを大切にしている。

③ICT の活用

淡路市では、４～６年生の子どもたちには、一人に一台タブレット端末が貸与されている。教室には無線 LAN が設置され、教室にいてもすぐにインターネットにつながる環境にある。子どもたちは、情報の収集や整理・分析、まとめ・表現する際に活用

している。最近のタブレット端末の機能向上により、個人で調べたり分析したりしたことが、グループで一つの成果物としてまとめられるようになり、協働して課題に取り組めるようになった。

（3）カリキュラム・マネジメント

①教科横断的な学習

生活科、総合的な学習の時間を核に各教科を資質・能力でつなぐことを意識するために、指導案に「この単元を通して育成したい３つの資質・能力」という表を挿入した。単元構想では、小単元ごとに関連する教科等の内容を資質・能力で表記し、年間を通して教科横断的な学習により子どもたちにつけたい力が明確になるようにした。

②PDCA サイクルによるカリキュラムの見直し

年度末に年間計画の見直しを行い、１年間の教育課程を評価し改善を図る機会を設けた。

③地域の材「ひと・もの・こと」を取り入れた学習活動

〇地域とのつながりを大事にした活動

〇異校種間の接続（資質・能力でつなぐ）

・保育園とのつながり（知識、技能）

・中学校とのつながり（学びに向かう力、人間性）

・高校とのつながり（思考力、判断力、表現力）

④校内研修の工夫

カリキュラム・マネジメントを充実させるために、以下の校内研修を行った。

〇新学習指導要領における生活科・総合的な学習の時間とは

〇授業研究の工夫

〇教室環境、学校環境の整備

〇年度末におけるカリキュラムの見直し

2　成果と課題

令和元年 11 月 15 日、全国からたくさんの先生方に来ていただき、生活科・総合的な学習の授業公開を行った。先に研究の概要として示したような取組を、学校全体で行い、全職員が一丸となって研究を進めた結果、たくさんの先生方から高い評価をいただいた。この３年間の取組の成果として、子どもたちが主体的に学習に取り組んだこと、対話的な活動を通して自分に自信を持つようになったこと、そして、さまざまな事柄を関連付けて考えられるようになってきたことなどが挙げられる。また、地域に関心を持ち、地域の人とともに活動する中で、地域愛が育ってきたり、地域の人たちにほめられることで自己肯定感が高まってきたりした。

課題としては、この研究を今後どのように継続、発展していくかということである。今年度は、コロナ禍で昨年度と同じような活動はできなかったが、どの学年もそれぞれが工夫して昨年度と同じような活動に取り組むことができた。校内研修を通して生活科・総合的な学習の重要性も共通理解できたが、先の見えないコロナ禍の中でいかに活動を発展させていくのかが問われていると感じる。